生徒指導部通心（信）第１７号（２０２２．１０．２６）

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～語りに「間」、鑑賞に「沈黙」、青春に・・・・・「〇〇」～

世の中の変化とスピードには驚かせられますね。

便利なSNSなどを使って情報が瞬時に行き交うかと思えば、テレビなどでは芸人やコメンテイターと紹介される人たちがしゃべりまくる。まるで言葉の洪水、息つく暇もない現代社会ですね。

さて、１１月２日（木）に芸術鑑賞会が行われます。今年度は古典です。では・・・どうぞ・・・

日本独特の「間」と呼ばれる表現活動の文化が失われつつあることを危惧しています。

例えば落語で、歯切れよくまくし立てる江戸弁に聞き入っていると、突如「間」が入って一瞬の沈黙。そのとき聞き手は、新たな展開を予想して思わず耳を澄ます。実に巧みな話芸です。

同じことは音楽にも言えます。楽曲にはところどころに休符が配置される場合が多い。この休符は音が出ないものの、曲が切れるわけではありません。それは転調の節目として機能したり、一種の緊張をもたらす効果さえあります。

このように、落語の「間」も音楽の「休符」も、ともに力強いエネルギーが存在する、濃密な「沈黙」と言ってよいでしょう。まさに緩急の妙です。

・・・どうしても私たちは、何事にも性急になってしまった。野に咲く一輪の花でも芸術作品でも、その美しさを黙って鑑賞することなく、手っ取り早く知るためのデータの方を求めるようになってしまった。

余計なものを介さずに感受性を働かす、あるいは沈思黙考すること。その内的体験こそ精神生活における「間」なのです。・・・時の流れにただ身を任せるのではなく、いったん既定路線から降りて「道草」して、ゆっくりと自分を見つめ直す。それもまた「青春」なのです。

四国の讃岐出身の空海は、京に上り官吏養成機関の大学に入学するもなぜか中退。その後３１歳で遣唐使として入唐するまで四国の山地で修行に明け暮れたようですが、詳しいことは分かっていません。

空海の２０代は・・・**「謎の空白の時代」**と呼ばれています。

入唐後の活躍は目覚ましく密教の名僧、恵果から最高の評価をもらい帰国。その後当代随一の高僧となったのは周知の通りです。

空海の偉業は留学の成果ではなく**「謎の空白時代」**に蓄えられた成果であると評論家の立花隆さんは述べています。

機会に恵まれず地上の池に潜む龍を「潜龍」といいますが、空海の「謎の空白時代」はこれに似たところがあります。

いずれ「潜龍」は時を得たならば、青雲を巻き起こし天に昇る「昇竜」と化す。やはり、青年期には、そうした飛翔の前の支度の時間が欠かせないのです。

四国山地の石鎚山

「致知」12月号「風の便り」　占部賢志

確かに、「人間」って「人」の「間」って書きますね。この「間」を誤ると・・・・・**「間抜け」**や・・・**「間違い」**になるんですね。それほど我々は「間」というものを大切にしてきたんですね。

急ぎ足の時代だからこそ・・・語りに・・・・・・「間」を・・・・鑑賞に・・・・・「沈黙」を・・・

そして「青春」には・・・・時には・・・・「道草」も必要なのかもしれませんね。

いずれ時を得たならば、青雲を巻き起こし、天に昇る「昇竜」になる支度のために・・・

芸術鑑賞会は来週です。**鑑賞に・・・・・「沈黙」を・・・・・・そして・・・・・「間」を感じ・・・・・・楽しんでくださいね。**